

2007年（第16回）「ブループラネット賞」の受賞者

環境保護に「公共信託財産」の考え方を取り入れた世界最初の市民環境法の起草に携わり、環境保全に関わる法律を理論的に構築し、国際的にも環境法の体系確立に先駆的に貢献した

ジョセフ・L・サックス教授
(米国)

「ソフト・エネルギー・パス」の概念の提唱や「ハイパーカー」の発明により、エネルギー利用の効率化を追及し、地球環境保護に向けた世界のエネルギー戦略牽引に大きく貢献した

エイモリ・B・ロビンス博士
(米国)

財団法人旭硝子財団（理事長 瀬谷博道）の地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、今年で第16回目を迎えました。本賞は、地球環境問題の解決に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人、または組織に対して毎年2件贈られるもので、当財団理事会、評議員会は本年度の受賞者を次のように決定しました。

1) ジョセフ・L・サックス教授(米国) カリフォルニア大学（バークレー校）教授

米国のみならず世界を代表する指導的な環境法学者であり、環境保全をどう推進していくかの根拠を、法の立場から理論的に構築し、水利権、環境に関する市民の権利の訴訟戦略、環境影響評価に関する法律等、米国における環境関連法を先駆的に提示しました。中でも、公共信託財産という考え方を取り入れ、起草した世界最初の市民環境法であるミシガン州環境保護法は「サックス法」としても有名です。また、米国内のみならず、国際的にも各国政府、国連等多国籍組織を積極的に援助し、国際的な法理論の開発にも影響を与え、国際環境法が対象とする各種課題についても多くの考え方を提示しています。近年、文化的遺産や歴史的・考古学的資産といったものを保護する必要性についても公共信託概念の対象とすべきと位置づけ、環境保全のみならず、文化的資産の保護についても重要な役割を果たし貢献しています。

2) エイモリ・B・ロビンス博士(米国) ロッキー・マウンテン研究所理事長兼 Chief Scientist

地球環境保護に向け、過去40年間、世界の50カ国以上で、エネルギー利用の効率化、そして再生可能エネルギー源の利用への転換に貢献してきました。1970年代に、その根幹となるソフト・エネルギー・パスの概念を提唱して以来一貫して、エネルギー分野その他において、先駆的な概念を提唱し適用してきました。自然環境への大幅な負担軽減を可能とする超軽量、超効率の車、「ハイパーカー」を発明した他、建築物におけるエネルギー有効活用の可能性を実証しました。また、「ファクター4」や「自然資本主義」の著書で、資源生産性（資源の投入量当たりの財・サービスの生産量）を4倍にする具体例を示し、自然資源やエコシステムの重要性を説きました。博士の広汎な活動は、複雑に絡み合った世界のエネルギー、環境、資源、開発、安全保障等の問題に解決の道筋を示しています。

- 受賞業績1件に対して、賞状、トロフィーおよび副賞賞金5千万円が贈られます。
- 表彰式は10月17日（水）に東京會館（東京都千代田区）で挙行政され、翌10月18日（木）に受賞者による記念講演会が国際連合大学（東京都渋谷区）で開催されます。

※本リリースは、環境省記者クラブならびにエネルギー記者会に配布しています。
また、インターネットでも6月21日からご覧いただけますので、ご参照ください。

本年度（第16回）の選考経過

国内 1050 名、海外 1350 名のノミネーターから 121 件の受賞候補者が推薦されました。候補者の分野は、多い順に生態系 40 件、環境経済・政策 23 件、気候・地球科学 20 件などでした。

候補者は 29 ヶ国にまたがっており、途上国からの候補者は 15 件あり、全体の 12%に相当します。

選考委員会による数次の審査をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会、評議員会で、1 件はジョセフ・L・サックス教授が、もう 1 件はエイモリ・B・ロビンス博士が受賞者として正式に決定されました。

■本件に関するお問い合わせ先

財団法人 旭硝子財団	〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 2 階
事務局長 鮫島 俊一	TEL : 03-5275-0620 FAX : 03-5275-0871
	e-mail : post@af-info.or.jp
	URL : http://www.af-info.or.jp

受賞者の業績及びプロフィール

ジョセフ・L・サックス教授 (Professor Joseph L. Sax)

法の立場から環境保全をどう推進していくかの根拠を理論的に、先駆性をもって提示しました。水利権、環境に関する市民の権利の訴訟戦略、環境影響評価に関する法律等、米国での環境法の先駆者であり、公共信託財産という考え方を取り入れ、起草した世界最初の市民環境法であるミシガン州環境保護法は「サックス法」としても有名です。また、国内・国際環境法の適用・執行の実効性が上がるよう努力している米国の主な環境団体に、助言、支援を与え続けた他、政府、国連等多国籍組織を積極的に援助し、絶え間なく進む生態系の破壊、公害汚染、そして水や天然資源の枯渇といった問題に対処するため環境法が重要な役割を果たすよう貢献しました。

サックス教授は 1936 年に米国イリノイ州に生まれ、1957 年にハーバード大学を卒業し、1959 年にシカゴ大学から法学博士の学位を取得しました。その後、米国家務省勤務を経て、1962 年から 66 年の間、コロラド大学で法律学を教え、1966 年にミシガン大学法学部教授に就任しました。1986 年にはカリフォルニア大学バークレー校に移り、現在に至っています。

1. 「沈黙の春」がきっかけで環境法分野に取り組む

サックス教授は、環境法がまだ法律の分野として存在していなかった 1960 年代半ばから環境保護に関わるようになりました。Rachel Carson の「沈黙の春」がきっかけで殺虫剤散布に対する訴訟が多く起こされ、教授は、ミシガン州その他におけるディルドリンの散布に対する差し止め命令請求の裁判に関与しました。どの訴訟もまったく不成功でしたが、教授は、土地の所有権や契約に基づく権利等の法的な裏付けがないことを根拠に、裁判所が、自然資源を保護しようとする市民の活動・努力を拒絶するのを見、さらに、どの法律にも殆ど環境保護に関わる事項が含まれていないということを知り、環境法分野に関心を持つようになりました。

1969 年に教授はワシントンのポトマック川沿いのアパート建設に対する訴訟で、訴えの根拠が公共信託理論であることを知り、この理論に、環境保全という大義を推し進める法的根拠を見出しました。公共信託理論は、特定の公共的な自然資源の私的利用を制限するものであり、教授の見方は、そのような資源の中にある個人の所有権（地）は、基本的に制約を受け、個人は公共の利益に反するような権利をもたないとするもので、これが、教授の環境法の概念の中心をなしています。

2. 「エイプリル・フールのジョーク」と呼ばれた「サックス法」の起草・成立へ

市民による環境訴訟を公認し、環境訴訟における地位を保証するため 1960 年代に教授が起草し、1970 年にミシガン州議会で採択され「サックス法」として知られるミシガン州環境保護法は画期的な内容のものでした。すなわち、「大気・水・土地・その他の自然資源に関する公共信託に対する汚染・損傷・破壊について、市民、法人、団体などは、訴えることができる。」というもので、この法律の主たる特徴は、すべての人に公害やその他の環境破壊行為から法的保護を受ける権利を認め、裁判所にそのような行為に対して救済策を与える権限を持たせることを認めたことです。この規定が、連邦環境法の市民訴訟規定のモデルとなり、「民間司法長官」が法廷で環境価値を推し進めることを公認することとなりました。この法律が提出日の 4 月 1 日をもじって「エイプリル・フールのジョーク」と呼ばれたことから、当時いかに画期的であったか窺い知ることができます。

「サックス法」はその後、他の 12 以上の州における同様な法令のモデルとなりました。

1970 年には、「自然資源法における公共信託理論：効果的な法的介入」“The Public Trust Doctrine in Natural Resource Law: Effective Judicial Intervention”を著しました。この論文は、人々が総体として有する所有権に信託された海岸線や湿地等、環境に優れた景観を、議

会や行政機関が傷つけたり、売却したり、譲渡することを阻止する権威と責任を、米国の裁判所が持つことを主張した画期的なものです。これはまた、公共信託の理念に関わる先導的な考え方を述べたものとして、環境法史上で最も多く引用されており、米国において、一般公衆の信託の下に置かれている環境資源を傷つけることに対して、各州政府を規制する一連の法令制定を働きかけることとなりました。

3. 影響力は米国内のみならず国際的

教授は、1994年から96年の間、クリントン政権の内務長官顧問ならびに内務省政策担当次官補代理を務め、その後もクリントン政権に環境問題について助言しました。また、数々の米国公的機関をはじめ、日本を含む世界各国政府のコンサルタントを務めています。

教授は1970年に東京で開かれた公害問題を議論する国際シンポジウムに参加して、「環境権」の考え方を発議し、これがシンポジウムの結論となり、世界に向けて提唱されることとなりました。

教授は、環境法に関し、5冊の著書、9冊の共著書および、150あまりの論文を執筆しています。その他、数多くの雑誌に記事を書き、米国をはじめ世界で環境保護の改善の必要を強調しています。教授は論文等を執筆するだけでなく、環境法学会の創設を先導するとともに、Environmental Law Reporterを創刊しました。数多くの重要な環境問題に多面的に言及した教授の革新的な学識は、多くの人を鼓舞しました。国際環境法が、米国法が確立した様式を踏襲していることから分かるように、教授は国際的な法理論の開発にも影響を与え、国際環境法が対象とする各種課題についても多くの考え方を提示しています。

4. 公共信託概念は文化的遺産の保護へも発展

近年、教授は、私的所有権の及ぶ範囲の妥当性および公共の利益の合法性について説明するため、既に当たり前として受け入れられている文化的遺産、例えば偉大な絵画作品や歴史的・考古学的資産といったものを保護する必要性についても、世界の自然遺産を保護する必要性と同様の考え方を大胆に取り入れました。そして、「文化的遺産」を、もう一つの公共信託概念の対象とすべきと位置づけ、私的所有権の名目で主張できるものに限界があることを理解することが重要であると述べています。

教授は今日に至るまで、米国のみならず世界を代表する指導的な環境法学者として、法律関係で絶えず新しいイノベーションを創出し、環境および自然資源保護の法律の領域を広げ、多くの国々の法学者の考え方に影響を与え、また、環境保護・保全問題に関わる公共の事柄には積極的に関わり、広く世界的に活躍貢献してきました。

略歴

1936年	イリノイ生まれ
1957年	ハーバード大学卒業
1959年	シカゴ大学 法学院卒業 J.D. 取得
1962-1966年	コロラド大学
1966-1986年	ミシガン大学法学部教授
1986年～	カリフォルニア大学（バークレー校）教授
1994-1996年	内務長官顧問兼内務次官補代理

受賞歴

1976年	Environmental Quality Award, U.S. E.P.A
1977年	Elizabeth Haub Award, Free Univ. Brussels,

1984年 Wm. O. Douglas Legal Achievement Award, The Sierra Club
1985年 Environmental Law Institute Award
2004年 Distinguished Water Attorney Award

エイモリ・B・ロビンス博士 (Dr. Amory B. Lovins)

ロビンス博士は1970年代初めより、自然環境の保護を念頭に置いたエネルギーに関する独自の理論、さらにはそれに基づく政策提言および技術面での実践をとおして世の中に多大な貢献をしてきました。エネルギー利用の飛躍的効率化を可能とする再生可能エネルギー源を利用した分散型エネルギーシステムを中核とするソフト・エネルギー・パスの概念を提唱し、自然環境への大幅な負担軽減を可能とする超軽量、超効率の車、「ハイパーカー」を発明した他、建築物におけるエネルギー有効活用の可能性を実証しました。世界が石油依存から脱却するロードマップを提言し、革新的概念を技術的実践可能性および現実的な政策と結び付けて論ずることにより、将来の方向性を示しており、その業績は高く評価されています。

博士は1947年にワシントンDCに生まれ、高校時代は物理、音楽、古典、数学等の分野で才能を発揮しました。1964年にハーバード大学入学。1967年にオックスフォード大学マグダレンカレッジに移り実験物理学を学びました。1969年からオックスフォード大学マートンカレッジのJunior Research Fellowとなり、1971年に修士号を取得しました。

1. 環境・エネルギー問題に目覚める

14年間の英国滞在中、北ウェールズにあるスノードン国立公園に魅せられ、1971年に、当時Friends of the Earthの会長だったデイビッド・R・ブラウワー（1998年、第7回BP賞受賞者）からの依頼で、危機に曝されているウェールズの荒野についての本を執筆しました。この後10年間、Friends of the Earthの英国代表を務め、自然と環境に関心を持つと共に、気候との関連からエネルギー問題に入り込み、特にエネルギー戦略に興味を持つようになりました。1974年には、エネルギーに関する最初の著書「世界エネルギー戦略」“World Energy Strategies”を出版しました。

2. 「ソフト・エネルギー・パス」の概念提唱へ

1973年のエネルギー危機を境に、博士の考えに耳を傾ける人が増えていきました。1976年に「エネルギー戦略：まだ取られていない道」”Energy Strategy: The Road Not Taken?”をForeign Affairs誌に発表しました。この中で、博士はエネルギー問題を「エネルギー供給をどう増やすか」という従来の観点に対して、「どのようにして、個々のタスクに丁度良い量、種類、規模のエネルギーを最も安く供給するか」という観点から論じ、”Soft energy path”という概念を提唱しました。この概念は、エネルギーの効率的利用、そして太陽、風力、バイオ燃料、地熱等に基づく「ソフトエネルギー技術」”Soft energy technologies”の利用を主とする新たな体系を指すもので、既存の、化石燃料や原子力を利用する巨大な集中方式の発電設備の体系を指す“Hard energy path”の対極をなすものです。博士はこの概念に基づく体系が、エネルギー、環境、資源、開発、安全保障等が複雑に絡み合ったパズルを解く「鍵（マスター・キー）」となることを見通しました。博士はまた、ソフト・エネルギー・パスは実現可能であり、採算性があり、環境に優しく、世界の公平な発展に寄与し、ハード・パスの多大なコストとリスクを回避するものであることを示唆しました。

このSoft Energy pathの概念は、発表された当時、大きな反響を呼び、これに反対する人も多く、例えば、電力業界団体は、すぐに業界誌の全刊をあげて、Foreign Affairsに掲載された記

事に対し、容赦のない批判を掲載しました。その中で、博士を社会理想主義者と呼び、博士が自身の分析を歪曲しているとして、その経済的実現可能性を批判しました。しかし、博士を批判する人たちも、彼が何らかの天才であることは認めました。現在では、世界全体でソフトエネルギー技術活用の努力がなされてきており、博士の先駆性が立証される形となっています。

3. 「ロッキー・マウンテン研究所」設立では、建物のエネルギー効率を追求

その後、博士は精力的に本の執筆、産業へのコンサルティングを続け、1978年までに6冊の本を著し、世界15カ国でエネルギー分野の政策立案ロビイストとして活動しました。1979年にL・ハンター・シェルドンと結婚、1982年にはハンターと共同でRocky Mountain Instituteを設立し、資源の効率的利用そして再生利用について立案・研究を推進しました。1982年から1984年にかけて彼らの住まいであり、かつRocky Mountain Instituteの最初の本部となる建物を建設しました。この建物は、今でも世界で最もエネルギー効率の高い建物の一つです。一般住宅に比べ、室内暖房、湯沸しのエネルギーはその1%、家庭電力はその10%、水の使用量は半分で、太陽熱を利用した室内「ジャングル」では、セントラルヒーティング無しで、外気温が-44℃のときにもバナナが28本も取れたほどです。太陽熱の徹底的な利用のため、高性能の断熱材、ガラスを活用し、熱の取り入れ、散逸防止に留意しているのがポイントですが、個々の部品で個別に性能を発揮させるのではなく、建物全体をシステムとして最適化することで様々な便益をもたらすよう統合的な設計をしている点に特徴があります。にもかかわらず、建設費の増分は高々16ドル/m²で、1984年当時のテクノロジーでも10ヶ月間のエネルギー節約により返済できました。

4. 「ハイパーカー」の発明

Rocky Mountain Instituteではエネルギー効率の向上は常に研究の主要な対象で、あらゆる用途を詳細に調べ、特にエネルギーを大幅に節約できる対象に焦点を当ててきました。博士は1991年に、既にある技術（超軽量・超空力的構造とハイブリッド駆動）を、アイデアに富んだ簡素な車両デザインに組み込むことによりハイパーカーを発明しました。1991年から1993年まで、主要な自動車メーカーと協議を重ね、コンセプトを詳細に見直し開発に取り組み、1993年に発表し、日産賞を受賞しました。ハイパーカーはそれまでの車に比べ、3倍の燃費向上を達成し、価格も手頃でかつ性能・安全性に優れています。ハイブリッド駆動システムには、当初は内燃機関を使う計画ですが、将来的には圧縮水素ガスを燃料とする燃料電池で駆動することで、燃費性能を2倍にすることを想定しています。

5. 環境に配慮した資源の有効活用への数々の提言

1995年には前妻のハンター・ロビンズ、ワイツゼッカーと「ファクター4」を著し、50の具体的事例を挙げ、資源生産性（資源の投入量当たりの財・サービスの生産量）を4倍にすることで、豊かさを2倍にし、資源の使用を半分にするやり方を示しました。

そして1999年にはハンター・ロビンズ、ポール・ホーケンと「自然資本主義」（"Natural Capitalism"）を発表し、社会および全ての生物に必須の空気・水の浄化、気候の安定化、廃棄物の無毒化などを担ってくれる自然資源やエコシステムの総和としての「自然資本」、計り知れない経済価値を持つ「自然資本」の重要性を説きました。

そして、2004年に発表した"Winning the Oil Endgame"で、アメリカにおける今後の石油需要の大幅な削減を可能にするロードマップを示しました。革新的技術と新しいビジネスモデル、そしてこれまでに無い公共政策を組み合わせることで新しい体制への移行を加速し、2040年代には石油に依存から脱却できることを提唱しています。

博士は、卓越した先見性をもって、1970年代以来地道にかつ一貫して、エネルギー分野その他において、先駆的な概念を提唱し適用してきました。非効率的なエネルギーの利用が多く、経済問題、安全保障問題、そして大部分の環境問題を引き起こしているとして、その解決に向け有力

かつ革新的な技術、事業、政策を設計しました。また同時に、高いエネルギー効率を達成し、エネルギー供給を持続可能なものとするこゝで、より安全で健全な環境を保ち、気候が安定化し、実りある未来へと導く社会をどうやって達成するかを示しました。

略歴

1947年 米国ワシントンDC 生まれ
1964-1967年 ハーバード大学在学
1967-1969年 オックスフォード大学マグダレンカレッジ
1969-1971年 オックスフォード大学マートンカレッジ Junior Research Fellow
修士号取得
1982年 Rocky Mountain Institute を共同設立、現在 Chairman & Chief Scientist
1999年 Hypercar, Inc. (現 Fiberforge, Inc.) 設立 会長
1968年以來 米国を始め、世界各国の政府、産業界でコンサルタントを務める

受賞歴

1982年 Mitchell Prize
1983年 Right Livelihood Award
1989年 Delphi Prize
1993年 Nissan Prize, ISATA
1997年 Heinz Award for the Environment
1998年 Lindbergh Award
1999年 World Technology Award
2000年 Time Heroes for the Planet Award
2001年 Shingo Prize
2005年 Jean Meyer Award
2006年 Benjamin Franklin Medal, Royal Society of Arts (London)
2007年 Honorary Member, American Institute of Architects

受賞の辞

ジョセフ・L・サックス教授

本年度の「ブループラネット賞」を受賞し、大変光栄に思います。本賞は、地球環境の保全こそ私達が緊急に取り組むべき課題であることを強く認識したもので、環境問題の解決に向かって日々努力している者すべてに大きな励みとなっております。特に私にとりましては、科学的取組みに基づく業績を重視される旭硝子財団が、この度、私への授賞を通して、社会を治めるにあたって科学的取組みに基づく業績を適用したり、環境被害で苦しむ人々に公正を約束する上で、「法」が果たす役割を高く評価されたことを大変嬉しく思っております。

私は、環境法がまだ多くの人々に「一時的な流行」と見なされ、重要視されていなかった時代に三度日本を訪ね、同分野で先駆的役割を果たされた方々と環境問題について一緒に仕事をしました。この度の受賞で日本に戻る機会を得ることができ、楽しみにしております。この場をお借りして、長年私の仕事を鼓舞し続けて下さいました故都留重人教授に、心からの謝意を申し上げます。

エイモリ・B・ロビンズ博士

この度、ブループラネット賞の受賞者に選ばれ光栄です。環境問題の大半、そして開発あるいは安全保障問題の多くはエネルギーの過剰消費や誤使用によってもたらされています。エネルギーこそ、このように絡み合った難問を解き放す鍵であり、たとえば水問題のような他の問題への解決策を教えてください。

私は今から 30 年ほど前の 1976 年に、エネルギー問題とは、より多くのエネルギーを、どのような種類であれ、その源が何であれ、価格が幾らであっても、どこからか見つけるといった類の問題ではないことに気づきました。誰も、単に電気やドロドロとした原油が欲しいだけでなく、私たちが望んでいるのは暖かい風呂や、冷たいビール、機動性、鮮明さ、快適さ、調理された料理等のサービスなのです。このサービスを最も安価に実現するのに、どれ位の量と品質あるいは規模のエネルギーをどのエネルギー源から必要とするのでしょうか。

この新しい問いかけがよりよい解決方法へと導きました。今日、既に効率化が進んでいる日本も含め、どの国も一定のエネルギーからこれまでの何倍もの仕事を搾り出すことができ、更に必要なエネルギーは再生可能エネルギーで十分まかなえます。これらの転換は理にかなったものであると共に、利を生み出すので、多くの企業が転換を進め、その結果、他の多くの問題の解決ももたらしています。

幸運にも私はエネルギーの転換という仕事をライフワークにし、世界中の素晴らしい仲間と共に努力を重ねてまいりました。荣誉ある「ブループラネット賞」は、青い地球の存続にとって極めて重要な使命を共有するすべての人々の支え、励ましとなっております。

日本の皆様へ

ジョセフ・L・サックス教授

自然環境を理解し保護するための研究活動を奨励している「ブループラネット賞」の受賞者に選ばれ、大変名誉に思います。今日、人間活動による地球への悪影響を減らそうとする研究の重要性を認識することは、かつてないほど時宜にかなったものであり、緊急性を帯びています。特に私にとりましては、この度の受賞によって、科学的取組みに基づく業績を实践する上で法律が果たす役割の重要性が認められ、嬉しく思っております。私は約40年前、環境保護を目的とした初めての国際会議に出席するために日本に来ましたが、この秋、その東京を再び訪問できることをとても楽しみにしております。

エイモリ・B・ロビンズ博士

—地球環境保全に向けた私の信念—

日本の国旗は太陽を表わし、伝統的な日本の家屋は自然と融合しています。日本人は技術を単に機能性だけでなく、使う人の感性で判断します。日本は効率の高い車、製造プロセス、太陽電池等の分野で世界をリードしています。日本の産業界の天才達は廃棄物を出さない極めて強力なツールを発明しました。そして、日本社会は一旦新たな合意に達すると、進んで、悔いることなく進路を変更し、どこの国よりも早く前進します。

日本は、世界が効率的にエネルギーを使用し、再生可能エネルギー源へ向け転換することをリード出来るのです。これらは日本の全需要を採算性良く満たすことができるのです。何故なら日本は、化石燃料には乏しくても、再生可能なエネルギー、人的エネルギー、創意工夫、伝統的な知恵等に恵まれているからです。この度、私が多くを学んだ、卓越した文化を持つ日本で、私の努力が認められ賞を受けるのは、まさに適っており、謙虚な気持ちにさせられます。